自然環境の保全に関して気になる事項

石沢　進

植物多様性を失わせる除草剤

青々とした緑の芽生えに大地の生命の営みが始まったと思うと、畑、水田、家屋の周辺に除草剤が散布され、伸び出してきた緑が根から枯死させられ、消失してしまう。草を刈る作業では大変な労力がかかるので、一瞬にして枯死させる除草剤の威力には、驚くと共に、その便利さも理解できるが、一方ではこれでよいのか、と疑問を感ずる。この冊子でも除草剤が野生植物に与える影響について既に何度か記事を掲載しているが、散布範囲が広がる一方に思えて再度とりあげ、多くの方に除草剤のことを考えて頂くきっかけになればと思っている。

吉田町の町内で大切な植物の生えている宮小路の神社があり、その境内に除草剤を撒かないよう、申し入れたことがあるが、自治体では、人手がないので、駄目だという。どしても除草剤を撒かないで置きたいというのであれば、誰か草を刈ってくれる人を集めて手入れをしてほしいとの返答であった。「除草剤散布を再度考え下さい」とお願いしてみたが、その後も理解が得られずに毎年除草剤が撒かれて多数の植物の生えている神社の境内は種の数を減少させてしまっている。

今年（2003年）の7月と9月の二度、吉田町宮小路の神社を訪れて、落胆した。この神社は西川沿いの平野部にあり、杉が植林されている。その下層には、平野部であるのにゼンマイ、ショウジョウバカマなど山地の植物が生育し、その他多くの種類が生えており、吉田町でも貴重な地域である（吉田町史自然編に掲載）。そのことを、町史でも大切にするように、また、吉田町の関係者にもそのようなお願いもしたが、全く配慮して頂けずに、極めて残念な状況に変わってしまった。特に今年は強力な除草剤が散布されたようで杉の下層に在来の植物が完全に枯死して、7月の訪問時には裸地化して緑がすっかり失われてしまっていた。吉田町の植物が集約して生えている町の貴重な地域であり、平野部に残された自然の片鱗であると指摘したにも拘わらず、その惨憺たる現状を見るにつけ、自然に対する理解度の無さに心に憤りさえ感じ、次世代に地域の自然を残して伝えていく配慮の欠落に唖然としてしまった。

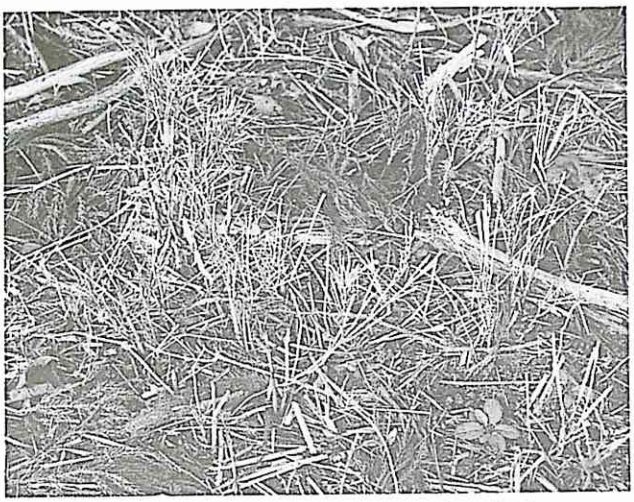
自然界の大切さを見直し、生物の多様性を保持することが重要といわれている昨今、このような現場を見るにつけ、これで良いのだろうか、この現実の姿が後にとんでもない影響を与えるのではないか、つい考え込んでしまう。毎年散布される除草剤は、一見便利で、生活するのに快適な印象を与えているが、果たしてそれでよいのか、大きな疑問がつのるばかりである。散布された後に、辛うじて生き残った植物の形は、本来の姿とは別な状態になり、まさに奇形となってしまう。その姿をみるにつけ、除草剤の影響の大きさに身の毛のよだつ思いである（写真参照）。

除草剤の影響で奇形となった植物

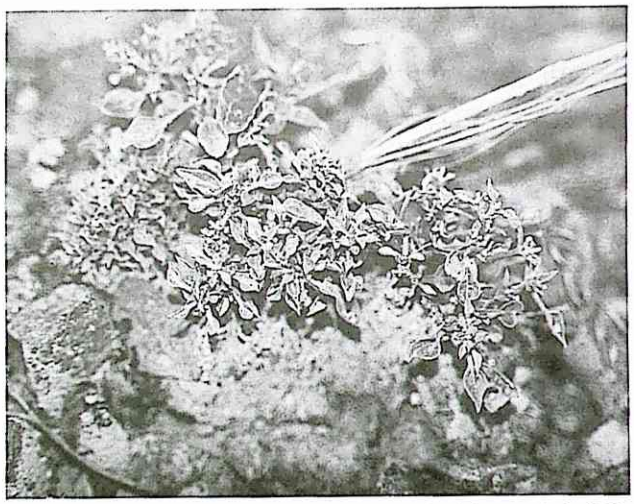
［下の写真：シロバナカモメヅル　次頁の写真：ヤダケ、センニンソウ］

シロバナカモメヅル（散布後、奇形の葉をつけて発芽）

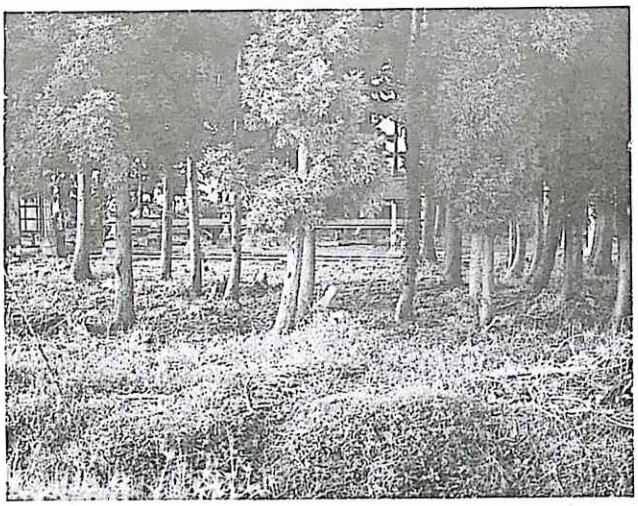
ヤダケ（散布後の奇形葉とテングス病のような多数の稈の発芽）



ヤダケ（多数の稈が追加散布で完全に枯死）



センニンソウ（散布後の奇形葉とテングス病のような多数の茎の発芽）



除草剤が散布され、多くの植物が枯死した神社境内

海藻にも影響を与える除草剤

出雲崎町文化財審議委員と同道して視察中に、出雲崎の海には異変が起きているとの話を聞いた。その異変とは、出雲崎の海にはツルモが生育していて、採取して食用にしていたが、現在ではその機会がなくなったという。また、岩場に漂うように生えているホンダワラの数が少なくなり、海底の岩が露出しているという。エゴノリも打ち上げられる量が極端に減少したという。このような海中の異変は、大量に利用されている除草剤の影響ではないかと、審議会の委員の多くが指摘している。海藻と除草剤との直接的な関係は、実証されていないが、過去の生活習慣との大きな違いは、除草剤散布の増加であると考えると、理に叶っている。

その他、自然環境を売り物にしている市町村でも、除草剤の散布を行っているが、自然を大切にすることと、除草剤を散布することは、相反する行為と思うが、深く考えずに除草剤を使っているようで残念である。

安易に使用できる除草剤を何らかの形で規制しないと、生態系全体の破壊につながるようで、安心して居られない。具体的な提案があれば、ご指摘願いたい。

除草剤だけではないが、様々な化学物質－自然界には存在しないもの－が身の回りに溢れている昨今、無神経で過ごされていて、恐ろしいことである。このことは有吉佐和子の複合汚染ですでに、警告されているが、その対策に動き出さない我々は、後世まで大きな責任を問われることになるであろう。少なくとも除草剤という身近な化学物質を与えると植物は本来の姿でない、奇形になることを見つめ、その影響力の大きさを知ってほしいと願っている。

そして、過去に身の回りに極く普通にあった植物の中には、除草剤の散布によって消失している多くの野生生物の存在を認識してほしい。生物の多様性の保全は、われわれの生活圏の中に温存させ、共生させることから考えてみたいものである。生物の多様性を温存させることは、人間の安全な生活の基盤を保障していることにつながる。

なお除草剤に関して、臼杵千枝子氏が「河川敷の除草剤も規制を」と題して新潟日報（2003年3月4日）の「私の視点」に掲載している。

植林、植栽、移植の防止

生態系維持の立場から、気掛かりな行為に、植林、植栽、

移植の問題がある。山があらされ、山の植物が絶滅したか、少なくなったとして、他の地域に生育している植物を移植する行為が、かなり多方面で、安易に行われている。行為を行う方々は善意で、荒らされた自然の豊かさを取り戻したい、より豊かにしたいとの熱意で進めている。しかし、その行為はそれぞれの地域で長い間に形成された生態系に異質なものを持ち込むことになる。極端な言い方をすると、それぞれの地域の生態系の特色をなくしてしまうことになる。

具体的な例で関係者には、不愉快な感じを与えることになると思うが、お許しを頂きたい。

1) 東蒲原郡上川村の「たがしら湿原」には、北海道の野生種などを多数植え込んであり、上川村の本来の自然の植生ではない。いろいろな植物を見せるための目的で人為的に作ったものであるから、訪れる人々が満足してくれればそれで良いではないか、と指摘する方もいるであろう。確かに県内の人がそこを訪れて県内で見られない花々をみて満足していると思う。しかし、県外から訪れた人々には、その状態に感激もしないし、初めから訪れないと思う。上川村の地域内で自然に存在している生態系ではなく、逆に村の自然の特色を破壊している所をわざわざ見に来る人々はいないであろう。

2) 長岡市の雪国植物園では、初期には長岡地方の植物をそのまま、自然の状態で見れるということで、期待していたが、最近では園内に長岡では自生しない多くの種が植栽されているようで、訪れた人々は、満足しているらしいが、次第に「雪国の植物園」でなくなることは、残念である。長岡を特徴づける植物園として位置づけることを重視した方が、「長岡の雪国植物園」として強い印象を与え、県外の方々にも広く長岡に自生する雪国の植物を紹介して頂ける場になると考える。次々と奇麗だから、珍しいからといって自生していない植物の移入は本来の雪国の生態系が崩れてしまう。

3) その他、湯沢のアルプの里などのように人を呼ぶために開園している所もあるが、自然植生の広がる地域の中に、あるいはそれに隣接して新たな施設を造る場合には十分な検討が必要と考えている。また、樹林の中に施設を作り、その周辺に様々な植物を植えて楽しみたい、訪れる人々に感銘を与えたいなど、その気持ちは理解できないこともないが、その行為はその土地の生態系とは異質なものを移入してしまうことにつながる。

弥彦山の山頂部の登山道沿いにアジサイが植栽され、年々数が増やされている。花の咲く時期に訪れると一見豪華な感じを与えるだろうが、どこにでも見られる公園と同じ状態になって特色がなくなる。この登山道沿いには、アジサイがなくとも、自生の可憐な花々が四季を通じて見ることができ、特色を出せると思うのに、その自然の素晴らしさを破壊している。自然に対する理解度の低さと人の身勝手さに憤りを感じ、また、訪れる度毎に悲痛な思いが込み上げる。田上町の護摩堂山も山麓から山頂にかけて植物の豊富な登山道だったが、手入れがよくなり、特に山頂部のアジサイの植栽によって、もともとの生態系がすっかり失なわれてしまい、残念でならない。人を呼び込む公園の在り方を、それぞれの地域で、自然を基盤にした特色あるものにしてほしいと願っている。

「緑を豊かに」と称して様々のイベントが実行されている。例えば、「森林ボランティアの日」を決めることには異存はないが、問題は実施の内容について吟味する必要がある。集まって「ただ植物を植えればよい」という、安易な植林は意味がない。昨年の黒川の植樹祭はその傾向が強く、将来に向けての植林としては意味が薄く、植える場所や植える樹種など細い配慮がなされていない。

ボランティアに限らず植林する行為は十分注意が必要であろう。特に広葉樹など木材の生産目的ではなく緑を回復する意味の植林では、生物の多様性を考慮した樹木の植林でなければ、植えない方が、むしろ賢明である。つまり、植えないで自然の推移にまかせた方が自然の多様性が維持されると思う。

具体的な例として角田山の山頂にブナを植えるイベントが行われたことがあるが、現時点で野生状態でブナの生えていないところに、何処で育成したか分からないブナを植えることは、生態系保護の観点から是非とも避けてほしい行為である。「森林ボランティアの日」を設けて類似した行動を行うことのないような開催者の理解をお願いしたい。

また、新潟県の「緑の百年物語」の推進に当たっている方々には、これまでの「ただ植物を植えればよい」と思われるようなやり方には、十分な配慮が必要である。従来の植林にあたっては、あまり配慮されていなかったことであろうが、百年を目標にしている「緑の運動」としては、生態系に配慮しないと意味のないことになり、むしろこの運動が結果的には生態系の破壊になるであろう。是非今後の植林に当たっては考慮して頂きたい。

弥彦参道に植栽されたアジサイ